伊藤仁齋と戴東原

(一)復古に就て　(二)宇宙觀に就て1　(三)宇宙觀に就て2

青木晦藏稿

一　復古に就て

近世の後半期に於て儒學は支那に在りても我邦に在りても著しく復古の氣運が勃興し、遂に此の氣運を成し遂げて、支那に於ては考證學なる一派の學流が出來、我邦に於ても復古學なる一派の學流が起つたのである。是は抑如何なる原因に由つたものであるか。余の見る所に據れば此には二箇の原因があることゝ思ふ。一は遠因で儒學の流派に二大潮流があつたこと。二は近因で宋明性理學の反動であることが是である。

(一)遠因　孔子といふ人はその人物が大きくあつたから、博大深遠なる學理を悉く包容して遺す所なく、而も能く之を統攝貫通してその間に何等の矛盾も衝突もなかつたのである。此れ孔子がその門人に對して吾道一以て之を貫くと謂はれた所以であらう。然し孔子の思想の中には後來分派すべき傾向が既に存在して居つたことは蔽ふべからざるものがあつた。そは孔子が門人を敎ふるに當りて

之を二段に分けられたことである。孔子は當時一般の學生に對しては詩書禮樂の如き所謂文を敎授せられたものであるが、性と天道との如き幽玄の學理に至りては、一般の學生には授けないで上足の弟子にのみ傳へられたものである。是が抑孔子の學派に合理學派と經驗學派とを生じた所以であつて、曾子は合理學派の祖とも稱すべき人で、子夏は經驗學派の宗とも云ふべき人である。合理學派は主として孔子の哲學思想の方面を傳へたもので、(文學思想なきにあらざるも)經驗學派は主として孔子の文學思想の方面を承けたものである。(哲學思想なきにあらざるも)此の二大思潮は相互に盛衰消長して、清朝の時に至り宋明の合理學派の反動として起つたものが考證學である。而して我邦に於ても德川時代に至り朱王の合理學派に反對して起つたものが、伊藤仁齋・山鹿素行等以下の復古學である。

(二)近因　宋に至りて合理學派は漢唐訓詁學の反動として起り、老佛の思想と融通和合して一の學派を成した。その開祖とも稱すべきものは周濂溪その人である。而してその著太極圖說は簡單なる文章であるが、此が宋元明清四代の哲學思想の根原たるものである。その弟子に程明道・程伊川の二子があつてその思想を擴充發展せしめ、その他張橫渠・邵康節等の碩學が出でゝ斯道に貢献する所少からず、最後に朱晦庵といふ大學者が起りて遂に諸儒の說を集めて大成したので、此に性理學なる一の學派が出來上つたのである。その後に至りては歷代の官學となり、その勢力天下に普遍し、苟

も學者たるものは大抵性理學を學んで居らぬものはないと云ふ有樣であつた。然るに朱子と同時に陸象山といふ學者があつて、性理學の別派に屬する人であるが、當時は朱子の爲めに壓倒せられて大なる勢力を有するに至らなかつたけれども、明朝に至りて王陽明といふ崇拜者を得てその氣勢大に昂り、朱子學は之が爲めに抑壓せられ、羅整庵等の如き朱子學者あれども、到底之に敵することは出來なかつたのである。然るに陽明學も羅近溪・周海門等の學者に至つては、殆ど禪學と異ならざるものとなり、李卓吾に至りては全く陽明學の眞髓を失つて空疎放縱に流れその弊に堪へないものとなり了り、最早天下の人心を繫ぐに足らぬものとなつた。是れが實事求是の考據學の起つた原因であると思ふ。考據學者は大抵瑣末の考證のみを事として思想問題に觸れた人は殆どないと云つて宜しい程の寥々たるものであつたが、その中で思想問題にまで立ち入りて研究したものは獨り戴東原があるのみである。胡適といふ人は、

這八百年來。中國思想史上。出了三箇極重要人物。每人畫出了一個新紀元。一個是朱子。一個是王陽明。一個是戴東原。朱子的學說。籠罩了這七百多年的學術界。中間只有王陽明與戴東原兩個人。可算是做了兩番很有力的反朱大革命。（戴氏三種序言）

と云つて、朱子及び王陽明の後の第一の哲學者と見て居るが、それは少々溢美の言で、余はそれ程の哲學者とは認めないが、彼が考據學派の中の哲學者では第一位を占むべき人であることは確に認

むるのである。汪中と云ふ人も大に戴東原を稱揚して、

諸儒崛起。接二千餘年沈淪之緒一。通儒如顧、閻、梅、胡、惠、戴。皆繼往開來。至戴氏集其大成。（漢學商兌中）

といつて居るが、最も溢美の言で、考據學派の思想を集めて大成したことは事實であるが、孔子以後の第一等の人の如く云へる處は過褒の甚しいもので、寧ろ滑稽に聞ゆるのである。彼は宋學に反對して蹶起したことに就て左の如く述べて居る。

宋以前。孔孟自孔孟。老釋自老釋。談老釋者。高妙其言。不依附孔孟。宋以來。孔孟之書。盡失其解。儒者雜襲老釋之言以解之。於是有讀儒書流入老釋者。有好老釋而溺其中。既而觸於儒書。樂其道之得助。因凭藉儒書。以談老釋者。同己則共證心宗。對異己則寄託其說於六經孔孟。曰吾所得者聖人之微言奧義。而交錯旁午。屢變益工。渾然無罅漏。……譬猶子孫未覩其祖父之貌者。誤圖他人之貌。爲其貌而事之。所事固己之祖父也。貌則非矣。實得而貌不得。亦何傷。然他人則持其祖父之貌。以冒吾宗。而實誘吾族。以化爲彼族。此僕所由不得已而有疏證之作也。破圖貌之語。以正吾宗。而保吾族。痛吾宗之久墜。吾族之久散爲他族。敢少假借哉。（孟子字義疏證卷下附錄答彭進士書）

此が戴東原の宋學に反對して眞の孔孟の說を復興せんとした所以の動機である。蓋し彼より見れ

ば宋儒の說は宇宙觀の中にも人生觀の中にも、老釋の說を雜へたもので孔孟の眞思想でないと見えたのである。その說の眞否は姑く之を措き、その勇氣は實に多とすべきものがある。彼は宋學に反對すると同じく陽明學に對しても大に反對して居るが、陽明學に對しては一層手嚴しく攻擊しておる。故にその言にも陸王主二老釋一者也。程朱闢二老釋一者也。といつて居るのがある。陸王を以て老釋を主とするものなりとは實に攻擊も甚しいものである。その他の言を擧ぐれば左の如くである。

老氏曰。唯之與レ阿。相去幾何。善之與レ惡相去何若。釋者曰。不レ思レ善。不レ思レ惡時。認二本來面目一。陸子靜曰。惡能害レ心。善亦能害レ心。王文成曰。無レ善無レ惡心之體。凡此皆不レ貴レ善也。何爲不レ貴レ善。貴二其所レ私。而哀二其滅一。雖レ逐二於善一。亦害レ之也。……釋氏所レ謂本來面目。陽明所レ謂良知之體。不レ過二守レ己自足一。既自足。必自大。其去二中庸擇レ善固執。博學審問愼思明辨篤行一。何啻千萬里。（同上）

戴東原の言は必ずしも陸王の說く所を得たものでないが、之に對する反對攻擊の言は甚しいものがある。東原の陸王學に對する態度は此の如きものであるにも拘らず孟子字義疏證及び原善の中には却て陸王に對する攻擊の言が少ない。是は陸王の學は老釋を主とするものとして論外に置いて居るからであらう。然るに老釋を闢くといつて居る宋儒の說に對しては却て盛に攻擊の鋒を向けたのは、宋學は淸朝の初めに張楊園・陸桴亭・陸稼書・李光地等の諸大儒があつてその說を鼓吹したるが爲めに、多少の勢力を保持して居つたから之を打碎く必要があるのと。宋學の說く所は孔孟の說に

紛ぎるゝ所があつて、却て孔孟の眞を亂ると考へた所があつた爲めとの二箇の原因があつて強く當り散らしたものであらう。

以上は戴東原が起りて宋明の哲學に反對して復古學を唱へた所以であるが、更に我が邦に於ける狀況を考察して見よう。我邦に於ては德川氏の初代に當りて藤原惺窩・林道春の如き大學者が出でゝ朱子學を鼓吹し、その門下にも幾多の人材輩出し、朱子學は一の官學となりて將軍家に講せられ、偉大なる勢力を得んとして居り、民間には山崎闇齋の如き純乎たる朱子の泰斗が出で、その門人にも三宅尙齋、佐藤直方、淺見絅齋等の大家ありて天下に唱導したるを以て、その勢力侮るべからざるものがあつた。而してその學說に疑を挾み遂に獨立して一派の學說を建設したものが伊藤仁齋・山鹿素行等の古學者である。此等の人も初めは宋學を研究したものであるが、中年に至りて程朱の說は、孔孟の眞意を得て居ない所があると疑つたので、遂に之に反對することゝなつたのである。

仁齋のいふ所を見るに左の言がある。

余十六七歲の時、朱子の四書を讀み、竊に自ら以爲らく是れ訓詁の學、聖門德行の學にあらずと。然れども家に他書なし、語錄、或問、近思錄、性理大全等の書、尊信珍重熟思體翫、積むに歲月を以てし漸く其の肯綮を得たり。二十七歲の時太極論を著はし、二十八九歲の時性善論を著はし、後又心學原論を著はし、備に危微精一の旨を述べ、自ら以爲らく深く其底蘊を得て宋儒の未だ發

せざる所を發すと。然れども心竊に安んぜず。又之を陽明近溪等の書に求むるに心に合することありと雖も益々安んずること能はず。或は合し或は離れ或は從ひ或は違ふこと其幾回なるを知らず。是に於て悉く語錄注脚を廢して、直に之を語孟二書に求め、寤寐以て求め、跬步以て思ひ、從容體驗以て自ら定むることありて醇如たり。是に於て余が前に著はす所の諸論皆孔孟と背馳して、反りて佛老と相隣ることを知る。（同志會筆記）

其後三十七八歲。始覺明鏡止水之旨非是。漸々類推。要之實理。釁隙百出。而及讀語孟二書。明白端的。殆若逢舊相識矣。心中歡喜。不可言喩焉。（古學文集卷六）

仁齋は此の如くにして始めて孔孟の古に復りて一旗幟を立つることが出來たのである。然し陽明學の學に就ては多くを言はなかつたのは、彼は深く陽明學を研究して居なかつたのではあるまいか。語孟字義の中に、

王氏之學。蓋自淨智妙圓宗旨來。故爲此一偏之敎。而不知良知良能。本我心之本然。不可須臾離焉。而與孟子之旨。幾霄壤矣。

と云つて居る。又同志會筆記の中に陽明學の佛說より來りて孔孟の眞を得て居ないことを論じて、

王陽明亦以見聞學知爲意見。以良知良能爲眞知。其以良知爲眞知。似矣。然以見聞學知爲意見者。亦猶佛氏之見也。

といつて居るが、その他には程朱に對する程嚴しく攻擊して居ないことは、戴東原と幾ど異なる所がない。此は多分同一の趣旨に出でたもので、仁齋は陽明學を以て佛學に異なる所がないと思つたからであらう。

以上述ぶる所に據りて之を觀れば、支那に於ける復古學も我邦の復古學も皆同じく程朱陸王の學に反對して起つたものであり、その中の戴東原と伊藤仁齋も同じく程朱陸王の反動を見るべきものである。今二家の態度を比較するならば左の如くである。

(一)戴東原、伊藤仁齋が程朱陸王に反對した所依の書は同じく四書及び易の十翼で、而して宋學に反對する問題も殆ど同一である。

(二)東原は易に精しけれども仁齋は易の研究未だ至らざる所あり。然れども易書中の問題となつて居る箇處は殆ど同じである。

(三)仁齋の著には語孟字義と童子問とありてその學說を見ることが出來る。東原には原善三篇と孟子字義疏證と緒言とありてその學說を知ることが出來る。東原は孟子字義疏證と名づけて居るが、實は孟子のみでなく四書及び易に關して述べて居る。余は仁齋の生れたのは西曆一六二七年で卒年が一七〇五年であり、戴東原の生年が西曆一七二四年で卒年が一七七七であつてその生年に殆ど百年の前後あり卒年に七十餘年の差がある所より見て戴東原は仁齋の著書を見たことがあるの

ではあるまいかといふ疑を有して居る。然し此には何等の確證を有して居ないから何とも斷言は爲し得ない。故に姑く疑として存して置く。

因にいふ。戴東原の思想を見るには主として孟子字義疏證三卷。戴氏三種。戴東原集十二卷。を見れば宜しい。仁齋の思想を見るには主として語孟字義二卷。童子問三卷。仁齋日札一卷。古學先生文集六卷。論語古義十卷。孟子古義七卷。周易古義。等を見れば宜しい。兩家共に參考すべきものは猶多くあれども之を省略して置く。

二　宇宙觀に就て (1)

伊藤仁齋・戴東原の二家の說の全部を述ぶることは短論文の能くする所でないから、唯二家の宇宙觀と人生觀の一斑のみを擧げることにしたいと思ふ。

(一) 伊藤仁齋の宇宙觀

(イ) 氣一元論

伊藤仁齋は宋儒殊に朱子が宇宙の實在を以て理と說いたのに反對して一大元氣として說き而して此の一大元氣を活動的に表象して一大活物であると見たのである。仁齋の考では宋儒が宇宙の實在を理と見たのは宇宙を以て活動しない死物と認めたものであらうが此は大なる誤で、宇宙は一大活物であつて常に活動して已まないものであるといふのが根本の思想である。今その言を

擧ぐれば左の如くである。

蓋天地之間一元氣而已。或爲陰或爲陽。兩者只管盈虛消長。往來感應於兩間。未嘗止息。此卽是天道之全體。自然之氣機。萬物從此而出。品彙由此而出。可知自此以上。更無道理。更無去處。

（語孟字義上）

仁齋が天地の間一元氣のみといつて、一元氣を以て宇宙の根本とした點は、如何にも吳吉齋の云へる所と能く相似て居る。吳吉齋はその著吉齋漫錄卷上に、

何謂道。一陰一陽之謂道。何謂氣。一陰一陽之謂氣。然則陰陽何物乎。曰氣。然則何以謂道。曰氣卽道。道卽氣。天地之初一氣而已矣。非爲所謂道者別爲一物。以並出乎其間也。氣之混淪。爲天地萬物之祖。至尊而無上。至極而無以加。則謂之太極。及其分也。輕淸者敷施而發散。重濁者翕聚而凝結。故謂之陰陽。陰陽既分。而兩儀四象。五行四時。萬化萬事皆由此出。故謂之道。

と云つて居るが、之を仁齋の說と對照すればその類似點を發見することが難くない。然し此は二家の說の暗合で、仁齋が吉齋の說を剽竊したものではあるまい。蓋し宋儒が理を以て宇宙の實在とする理的一元論に反對するときは、勢漢儒以來の氣を以て宇宙の根本義とする說を取らざるを得ないことになつて、遂に兩家の說が暗合することゝなつたものであらう。一體氣を以て宇宙の根本義とすることは、吳吉齋及び仁齋等の發明に依るものでなく、漢儒以來の思想である。その一例を擧

ぐれば、漢書律曆志には、

太極元氣。函二三爲一。

太極中央元氣。故爲黃鍾。

といひ、又白虎通には、

地者元氣之所生、萬物之祖也。

といひ、鄭玄も、

太極者。極中之道。淳和未分之氣也。

といひ、皆何れも氣と爲して居る。此のみならず、莊子も太極を以て氣と爲して居るから、その太宗師篇に、

夫道有情有信。無爲無形。可傳而不可受。可得而不可見。自本自根。未有天地。自古以固存。神鬼神帝。生天生地。在太極之先。而不爲高。在六極之下。不爲深。云云。（六極疑當作太極）

といつて居る。此に據れば儒敎の古代に在りても、異端の敎に在りても、孰れも皆太極を以て氣と解して居るに至りては同一である。仁齋も漢儒が太極を以て一元氣と爲すを贊成して左の如く述べて居る。

聖人以天地爲活物。異端以天地爲死物。此處一差。千里之謬。蓋天之所以爲活物者。以其有一

元氣也。一元之氣。猶人之有元陽。飲食言語。視聽動作。終身無息。正爲其有元陽也。若元陽一絕。忽爲異物。與木石無異。唯天地一大活物生物不生於物。悠久無窮。不比人物之有生死也。既無所生。亦無所不生。萬古獨立。擷撲不破。豈容以虛無目之邪。故曰大哉乾元。萬物資始。乃統天。至哉坤元。萬物資生。乃順承天。聖人之論天。至此而極。從此以上。更不說一層之理。

漢儒以太極爲一元氣是也。此是千古不傳之祕。大易之露洩天機者也。（童子問卷中）

此に據れば太極を以て一大元氣を爲すの說は、戰國の時の莊子より始まつて漢儒も之に從つたもので、此の一元氣說が却て仁齋等の異端とする莊子の說を出でたものたるに至つては、仁齋等も一驚を喫せざるを得ないであらう。仁齋等は宋儒の說は老釋に本づいたもので、孔子の古說でないと攻擊しながら、自己の思想が漢儒に本づき漢儒の思想が莊子と同一說であるといふことを知れば、自己の說も孔子の古說でないと云ふことが知り得らるべきである。人を攻擊して己もそれと同一の轍を蹈んでは、自己の劍を以て自己を斬ると同一の愚を演ずることになるのではあるまいか。そは兎も角仁齋の氣を以て宇宙の根本主義と爲せる思想の自己獨得の見にあらずして、漢儒以來相傳の說に本づいたものであり、而して漢儒の說が又莊子の太極說に本づいたものであることは、以上述ぶる所に依りて知ることが出來得ると思ふ。然し大に之を力說して氣の一元論を建設したる功は我邦では仁齋に歸せざるを得ないであらう。

(ロ)氣の活動　仁齋は既に宇宙を以て一元氣として居るから、隨つて宇宙は常に生々として活動するものとして居る。之を名づけて生々主義と云ふも可、亦活動主義と云ふも可亦、積極主義と云ふも不可なることはあるまい。仁齋が此の活動主義生々主義積極主義を取つたのは、宋儒の說を以て寂靜主義消極主義と見たから之に反對したものであらう。宋儒の說が仁齋の見たるが如き果して寂靜主義消極主義のものであつたか否かは、後に論ずることゝして仁齋の說が之に反對して生々活動の主義を唱へたことは疑を容れない所で、歷々として徵證がある。兎に角仁齋の說の特色とすべき所は、實に此に在ると見て誤りはないと思ふ。仁齋の說に、

易曰天地之大德曰生。言生々不已。卽天地之道也。故天地之道。有生而無死。有聚而無散。死卽生之終。散卽聚之盡。天地之道。一於生故也。父祖身雖沒。然其精神則傳之子孫。子孫又傳之其子孫。生々不斷。至于無窮。則謂之不死而可。萬物皆然。豈非天地之道有生而無死耶。故謂生者必死。聚者必散則可。謂有生必有死。有聚必有散則不可。生與死對故也。(同上)

と云つて居るのが是れで、此は天地は一大活物で常に生々して已まないものであるから、隨つて宇宙は永遠無窮に生の連續のみにして、その間に死滅といふことはなく、不朽不滅のものであると見たのであつて、是は易に天地の大德を生と謂ひ、生々之を易と謂ふとあるに據つたものである。宇宙を以て生々の連續して息まないものと見れば、その間に消滅といふことの有るべき理はない。

一時消滅したるが如く見ゆるのは其の消滅でなくして、唯生々の變化のみでその本質は矢張り不朽不滅のものであると見るべきである。仁齋の此の考は物質不滅勢力保存の說と同一の思想より出でたもので非眞理といふことは出來ないが、此には本質と現象との區別を立てゝ見なくてはならぬ。現象の上より云へば天地間の物悉く生死あり聚散あり動靜ありて一刻と雖も變化せざるものはない。然しその本質上より見れば、天地宇宙は永遠無窮の存在で、生なく死なく聚なく散なく動なく靜なく、生死聚散動靜を超越したる一如の存在があるのみと見るべきものである。

仁齋は此の如く宇宙を以て生々して息まず、永遠無窮に生の連續するものと認めたのであるから宇宙は動ありて靜なく、善ありて惡なきものと認めて居る。その言ふ所に據れば、

凡天地間。皆一理耳。有動而無靜。有善而無惡 蓋靜者動之止。惡者善之變。善者生之類。惡者死之類。非兩者相對而並生。皆一乎生故也。凡生者不能不動。惟死者而後見其眞靜也。其生也晝動而夜靜。然雖熟睡之中。不能無夢。及鼻息之呼吸。無晝夜之別。手足頭面。不覺自動搖。是皆其動處。字義所謂死者生之終。散者聚之盡是也。驗之天地。亦益信然。日月星辰。東升西沒。晝夜旋轉。無一息停機。日月相推而明生焉。寒暑相推而歲成焉。天地日月。皆莫不乘斯氣而行。若走馬燈然。兵卒輿馬。隨火氣而往來驅逐。旋而不已也。流水之爲物也。亙晝夜而不舍。艸木之有生也。雖隆冬亦有花。皆爲有動而無靜也。有善而無惡亦然。人之有是四端也。猶其身之有四

體。天下皆然。然適有生而無耳目口鼻者。謂之不成人。以其不成人也。故曰無惻隱羞惡辭讓是非之心者非人也。所謂惡者善之變。非相對而並生。其理不亦彰然乎。故伏犧之目無死物。孟軻之目無不善之人。非知道者。孰能識之。（童子問卷中）

とあるのが是である。是れ亦前の永遠に生の連續ありて死滅なしと見たのと同一の說で、仁齋の考によれば永遠に動の連續のみありて靜止の狀態なく、又永遠に善の存在のみありて、惡の存在なしと見たものである。然し是れ亦現象世界には動靜善惡兩つながら存在し動あれば靜あり、靜あれば動あり、無窮に動靜已む時なく、善あれば惡あり、惡あれば善あり、善惡相對して生じて已む時なきが如く見ゆれども、その本質に至りては永遠の動永遠の善のみありて、その間に靜の動に對し惡の善に對するものなきを意味するものでなければならぬ。兎に角仁齋が宇宙に生死なく聚散なく動靜なく善惡なく、唯存在するものは永遠の生聚動善のみであると見たのは、主として宇宙の空間上に於ける觀察である。然るに仁齋は更に時間的關係より見て宇宙を以て永遠無窮に存在するものと認めて居る。その言に、

夫四方上下曰宇。古往今來曰宙。知六合之無窮。則知古今之無窮。今日之天地。卽萬古之天地。萬古之天地。卽今日之天地。何有始終。何有開闢。此論可以破千古之惑。但可與達者道。不可與痴人道。（語孟字義卷上）

云つて居る所を見れば、その思想を知ることが出來る。然し時間と空間とは如何なる關係を有して居るかといふに、彼は空間は時間の中に在り、時間は空間の中に存在するもので相關聯して居るものと見て居る。

天道有流行。有對待。易曰一陰一陽之謂道。此以流行言。立天之道。曰陰與陽。此以對待言。其實一也。流行者一陰一陽往來不已之謂。對待者自天地日月山川水火。以至於晝夜之明闇寒暑之往來。皆無不有對。是爲對待。然對待者。自在流行之中。非流行之外又有對待也。（語義字義上）

と云へるは此の理を述べたものである。以上述ぶる所に據りて之を觀れば、仁齋は此の宇宙を以て一大元氣なりとして一大活物なりと認め、空間的にも生ありて死なく、動ありて靜なく時間的にも無始無終永遠の存在なりと認めたものである。

(八)氣の條理　仁齋は宋儒殊に朱子が理に所以然の理と所當然との區別を立て、所以然の理を體となし、所當然の理を用と爲すの說に反對して、理は氣中の條理で所以然の理の如きは、無物の地に就て物を求むるものとして極力排斥して居る。

所謂所以然之理者。非謂人之所以爲人。物之所以爲物。陰陽之所以往來消長之理乎。夫陰陽固非道。一陰一陽、往來不已者。卽是道。陰陽往來。天道成矣。剛柔相濟。地道成矣。仁義相須。人道成矣。天之道盡乎陰陽。地之道盡乎剛柔。人之道盡乎仁義。故易曰。一陰一陽之謂道。又曰大

哉乾元。萬物資始。乃統天。至哉坤元。萬物資生。乃順承天。古先聖人。所以論天道者。至此而極。更不於此上面復加一語。所謂太極云者。亦斥此一元氣而言耳。若於此上面。求其所以然之理。則是非向所謂就無物之地求物邪。故後世所謂無極太極之理。畢竟天地本無之理。而聖人之所不言。祛之可矣。（童子問卷中）

といへるは、此の理を說いたものである。仁齋は朱子の所謂所以然の理と、所當然の理との區別を全く知らないのではないが、所以然の理、殊に宇宙論に於ける所以然の理の幽玄なる味が分らなかつたのである。所以然の理には統體の一太極と各具の一太極といふことがあるが、此の統體の一太極の理が卽ち宇宙の實在で、所當然の理は實在の有する理法である。仁齋には此の宇宙の實在なる統體の一太極の理の意味が能く了解せられなかつたので、無物の地に就て物を求めると云つて、飽くまで現象にのみ卽して、現象以上の實體世界の理を悟り得なかつたのは仁齋の爲めに惜しむ所である。然し今姑く仁齋が所謂理の意味如何に就てその言ふ所を聞くに左の如く言つて居る。

理本死字。在物而不能宰物。在生物有生物之理。死物有死物之理。人則有人之理。物則有物之理。然一元之氣爲之本。而理則在氣之後。故理不足以爲萬化之樞紐也。萬物本乎五行。五行本乎陰陽。再推而至於陰陽之所以然。則不能不歸之於理。旣歸于理。則自不能不陷于虛無。所謂萬法歸一。一歸何所是也。此常識之所以必至此而與聖人自相違也。（童子問卷中）

理は所謂宇宙の理法の理で、朱子で謂ふならば所當然の理である。朱子も此の理法が自然界にも人生界にも存することを認めて居るから、別段反對すべき理由はない。而して此の理は氣中に存する條理法則を意味するものと認めて居つたであるから、仁齋の創見と稱すべきものでもない。仁齋は更に云ふ。

天地之間。只是此一元氣而已矣。可見非有理而後生斯氣。所謂理者反是氣中之條理而已。……大凡宋儒所謂有理而後有氣。及未有天地之先。畢竟先有此理等說。皆臆度之見。而畫蛇添足。頭上安頭。非實見得者也。（語孟字義卷上）

氣中に條理の存するの論は朱子が既に論じて居る所で、朱子は左の如く言つて居る。

理如一把線相似。有條理。（朱子語類）

理是有條理。有文路子。（同上）

陰陽五行錯綜。不失條理。便是理。

是の理は朱子の所謂所當然の理で、氣の活動は中に此の整然たる一定の條理の存するに由るもので、是の條理なくんば活動は停止せざるを得ないのである。然るに仁齋は實在の意味を有する宇宙根原の理と、實在が有する條理法則の意味ある理との區別が徹底して居らぬが爲めに、朱子が有理而後有氣。及未有天地之先。畢竟先有此理といへる所の理を、自己が說いて居る條理の理と同一

に見て非難して居るが、此の理は廣義の所以然の理である。此處は朱子の不雜の觀より來た說明で同體不離のものより强いて理（本體の理で條理の理にあらず）と氣とを引き離して說いたものである。此の複雜なる關係を有する理氣のことは仁齋には分らなかつたのである。且氣中に存する條理を意味する理は、朱子が說いたのみでなく吳吉齋も既に說いて居る。

理也者氣得其理之名。亦猶變易之謂易。不測之謂神之類。非氣之外別有理也。（吉齋漫錄上）

といふのが是である。吳吉齋のみでなく王陽明にも亦此の說がある。

理者氣之條理。氣者理之運用。無條理則不能運用。無運用則亦無以見其所謂條理者矣。（傳習錄卷中）

此等は皆朱子と同說で、朱子も此の意味の理氣の說があることは上文に述べるが如くである。然るに孰れも自己獨得の見の如くに思ひ、喋々之を論じて却て朱子の說を駁して居るのは、何たる疎漏の見であらう。

三　宇宙觀に就て (2)

(二)戴東原の宇宙觀

余は上節に於て伊藤仁齋の宇宙觀の大要を述べたから是より戴東原の宇宙觀の概略を述べて二家

の說の異同を比較して見たいと思ふ。

(イ)氣一元論　宇宙の根原を以て氣の一元と爲すことは、伊藤仁齋も戴東原も同一である。戴東原は自己の說が漢儒の說に本づいたことに就ては何等言ふ所はないが、仁齋と同じく漢儒に本づいたことは疑ふべからざるものである。その言ふ所に據るに左の如くである。

道猶行也。氣化流行。生々不息。是故謂之道。易曰一陰一陽之謂道。鴻範五行。一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土。行亦道之通稱。擧陰陽則賅五行。陰陽各具五行也。擧五行卽賅陰陽。五行各有陰陽也。(孟子字義疏證卷中)

此に依れば戴東原は氣化の流行して生々として息まざるを以て宇宙の道と爲して居ることを知り得らるゝのである。東原の所謂道は易の一陰一陽之を道と謂ふとある道を指したものであるから、天道を意味するもので、卽ち宇宙に行はるゝ活動を意味するものである。故にその言に又、

一陰一陽。蓋言天地之化不已也。道也。一陰一陽。其生々乎。其生々而條理乎。以是見天地之順。故曰一陰一陽之謂道。(戴氏三種原善上)

ともいつて居る。是れは氣化の生々として已まざるのは、條理に順うて亂れざるによるものであるといふ意味で、仁齋の所謂氣中の條理と同一の理を述べたものであると見て差支はない。而して太極を以て氣化の陰陽を意味するものとして居る點も仁齋が太極を以て天地の一元氣と說いて居る

のと一致する所がある。その言に據れば、

後世儒者。紛々言太極。言兩儀。非孔子贊易太極兩儀之本指也。孔子曰。易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。曰儀。曰象。曰卦。皆據作易言之耳。非氣化之陰陽。得兩儀四象之名。易備于六十四。自八卦重之。故八卦者易之小成。有天地山澤雷風水火之義焉。……伏羲氏觀於氣化流行。而以奇偶儀之象之。孔子贊易。蓋言易之爲書。起於卦畫。非漫然也。實有見於天道一陰一陽。爲物之終始會歸。乃畫奇偶兩者。從而儀之。故曰易有太極。是生兩儀。既有兩儀。而四象。而八卦。以次生矣。孔子以太極指氣化之陰陽。承上文明於天之道言之。卽所云一陰一陽之謂道。以兩儀四象八卦指易畫。後世儒者。以兩儀爲陰陽。而求太極於陰陽之所由生。豈孔子之言乎。（字義疏證卷中）

と述べて居る。易有太極云々の言は、宇宙の自然の現象に依りて易卦を作りたるをいふものであるが。太極を以て氣化の陰陽を指したものと見るは、東原等の考察に成つたもので、易の本旨ではあるまいと思ふ。易の本旨は宇宙變易の現象の中に變易をして變易たらしむる所以の最上至極の實體が存在して居るのを名づけて太極と稱したものと見るべきである。此は後に至りて詳しく論ずることゝしてその說く所に詳略の差はあるが仁齋の說と能く相似たる所のあるは否むべからざることである。此に就ては伊藤東涯の說く所も亦殆ど同說である。

此言卦爻占筮之所由始。太極者一元之氣也。一元氣分爲陰陽。畫一奇以象陽。畫一偶以象陰。謂之兩儀。一陰一陽。各有老少之異。故又畫一奇一偶。各加其上。爲老陰老陽少陰少陽之象。謂之四象。四象之上。又加一奇一偶。爲乾兌離震巽坎艮坤。謂之八卦云々。（周易經翼通解卷十七）

といへるが是れである。此の如く東原は宇宙の根本義を氣化の流行して已まない活動主義生々主義を取れることも、全く仁齋と同一であつた。その現象世界に卽して現象世界以上の實體の世界を直觀するの道眼を有して居なかつたので少しく高尙深玄のことを云へば孔子の本旨にあらずとして排斥し去つたのである。然し孔子の思想は此の如く現象世界にのみ卽して、それ以上に幽玄なる理を考へて居なかつたであらうか。子貢が夫子の性と天道とを言ふは得て聞くべからざるのみと云ふ所を見れば、孔子の思想に幽玄の理を體得して居つた所のありしことは想像し得らるゝではないか。

（ロ）氣の條理　戴東原の考に據れば宇宙は氣化の流行して息まざるものであるが、此の宇宙の生々活動して已まないと云ふことゝ、宇宙の條理整然として亂れぬと云ふことゝは相伴ふもので、決して相離るべからざるものであると認めて居つた。蓋し活動は條理の活動であり、條理は活動の條理であると考へたものである。此の點に於ても亦東原の說は仁齋の見と同一と認むべきものである。

一陰一陽。流行不已。生々不息。主其流行言則曰道。主其生々言則曰德。道其實體也。德卽於道見之者也。天地之大德曰生。天德不於此見乎。其流行生々也。尋而求之。語太極於至鉅。語

小極於至細。莫不顯呈其條理。失條理而能生々者。未之有也。故舉生々。卽該條理。舉條理卽該生々。實言之曰德。虛以會之曰理一也。（緒言卷上）

戴東原は更に進んで理の文字の意義より說明して理を以て氣中の條理なりとしていふ。

凡物之質。皆有文理。粲然昭著曰文。循而分之。端緒不亂曰理。故理又訓分。而言治亦通曰理。理字偏旁從玉。玉之文理也。蓋氣初生。物順而融之以成質。莫不具有分理。則有條而不紊。是以謂之條理。以植物言。其理自根而達末。又別於幹爲枝。綴於枝成葉。根接土壤肥沃以通地氣。葉受風日雨露以通天氣。地必上接於葉。天氣必下返諸根。上下相貫。榮而不瘁者。循之於其理也。……理字之本訓如是。因而推之。舉凡天地人物事爲。虛以明夫不易之則曰理。所謂則者。匪自我爲之。求諸其物而已矣。（緒言卷上）

東原の此の言は仁齋が理の字を說明して玉石の文理より來た文字で、事物の條理を意味するものなりといつて居るのと能く相似て居る。

道字本活字。所以形容其生々化々之妙也。若理字。本死字。從玉里聲。謂玉石之文理。可以形事物之條理。而不足以形容天地生々化々之妙也。（語孟字義卷上）

此の言を觀れば東原の言と仁齋の言との間にその詳略の差はあるが、言ふ所の趣意に至つては同一である。東原は更に條理法則なるものは普遍妥當性を有して居るものであるから、一人之を是と

して他人之を非とするが如きものは理でない。一人之を非として他人之を是とするが如きものも理でない。理なるものは一人之を是として萬人之を是とし、千古の上之を是として千古の下之を是とするものでなくてはならない。一人之を是として萬人之を非とするが如きものは意見と稱すべきものであると云ふ考を有して居た。故に理なるものは主觀的のものでなく、客觀的のものであるべしと見て居つたものである。此は認識論上の議論であるが、正當な考であらうと思ふ。此の議論は蓋し陸王の心卽理の說に反對したものと見ることが出來る。

夫天地之大。人物之蕃。事爲之條分委曲。苟得其理矣。如直者之中懸。平者之中水。圓者之中規。方者之中矩。夫然後推天下萬世而準。易稱先天而天弗違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎。中庸稱。考諸三王而不謬。建諸天地而不悖。質諸鬼神而無疑。百世以俟聖人而不惑。皆言乎天下之理得也。惟其爲人心之同然。故一人以爲不易。天下萬世以爲不易也。所以爲同然者。人心之明之所止也。（緒言卷上）

といへるは此の理を述べたものである。此に由りて之を觀れば、戴東原も仁齋と同じく理を以て氣中の條理となしたがその理なるものは氣が有する萬古不易の法則で普遍的妥當性を持つて居るものと認めたのは東原獨自の考察である。然し仁齋の所謂理も氣の存する限り永遠無窮に存在すべき筈のもので、氣が既に無始無終のものとすれば、理も亦無始無終ならざるべからざるは論を俟たな

い所である。故に是れ亦二家の說は同一に歸するのである。

(八)氣とは何ぞ　伊藤仁齋も宇宙は一大元氣而已といひ、戴東原も天地は氣化の流行而已といつて、共に宋儒の唯理論に反對して唯氣論を建設したのであるが。その所謂氣とは一體如何なるものであるか。二人共に自己の唱ふる氣の字に就て明瞭なる說明を與へて居ない。人の說に反對する學說を立つるに當りては、先づ自己が唱ふる所の用語なりその學說の內容なり明瞭にすべき筈のものである。然るに古人多くは此の考慮が缺けたるが爲めに、その論旨が明瞭でないばかりでなく、相互に同一の思想を取りながら、相互に論難攻擊するが如き奇觀を呈することも少くない。此等は皆その注意の足らざるより起つたもので缺點と謂はねばならぬ。然し二家の說に於て氣の字の意味が不明なれば、その學說全體が不明となる譯であるから、その思想の在る所を探尋して見ねばならぬ。先づ仁齋の說より考察を進めて見よう。仁齋は氣に就ては左の如く云つて居る處がある。

何以謂天地之間一元氣而已耶。此不可以空言曉。諸以譬喩明之。今若以版六合相合作匣。密以盖加其上。則有氣盈于其內。有氣盈于其內。則自生白醭。既生白醭。則又自生蛀蟫。此自然之理也。蓋天地一大匣也。陰陽匣中之氣也。萬物白醭蛀蟫也。是氣也無所從而生。無所從而來。有匣則有氣。無匣則無氣。故知天地間。只是此一元氣而已矣。可見非有理而後生斯氣。所謂理者反是氣中之條理而已。(語孟字義卷上)

此に謂ふ所の匣中に滿つる氣は、卽ち今の語を以ていへば空氣である。空氣は微細なる分子より成つて居るもので、殆ど吾人の目に見えぬ程のものであるが矢張り物質である。然らば仁齋の所謂氣は物質と見て然るべきか。若し物質とするならば、所謂陰陽は今の所謂陰電子陽電子の如きものと見て差支へないであらうか。陰電子陽電子は到底吾人には見ることの出來ないものであるが、之を精神的であるか物質的であるかと云へば、物質的であると答ふべきものである。而も此の陰電子陽電子は非常なる活動力を有して居るといふことである。仁齋が宋儒の說を以て老佛と同じく虛無に陷ると云つたのも、此の見地より見たのではあるまいか。

萬物本乎五行。五行本乎陰陽。再推而至於陰陽之所以然。則不能不歸之於理。既歸于理。則自不能不陷于虛無。（童子問卷中）

宋儒謂天專言則謂之理。又曰天卽理也。其說落虛無。而非聖人所以論天道之本旨。（語孟字義卷上）

此に由れば氣は形質を有する物體の如きものではないが、微細の原子の如きものと見るべきか。此の微細の原子には非常なる活動力を有するを以て常に生々として活動して已まない。それを仁齋は生々として已まざるは卽ち天之道なりといつて生々主義活動主義更にいへば積極主義を唱へたのであるまいか。此の如く見て誤りでないならば、仁齋の唯氣論は一種の活力說といふことは出來得るが、唯物論の傾向のあることは到底免れないことになる。仁齋の眞意果して此に在りや否や。此

七九

の最も大切なる所に於て不明瞭なるは遺憾なることである。依りて去つて更に戴東の說を探尋して見よう。然るに實は戴東原も仁齋以上に不明瞭である。戴東原は易の形而上者謂之道。形而下者謂之器。を說明して左の如く述べて居る。

氣化之於品物。則形而上下之分也。形乃品物之謂。形而上猶曰形以前。形而下猶曰形以後。陰陽之未成形質。是謂形而上者也。非形而下明矣。器言乎一成而不變。道言乎體物而不可遺。不徒陰陽非形而下。如五行水火木金土。有質可見。固形而下也。器也。其五行之氣。人物之所稟受則形而上者也。（緒言卷上）

此の言に由れば氣は形質とならざる以前のもので、萬物はその氣の既に顯はれて形質を成したものを云つたのである。此も宋儒の見と異なるは勿論であるが、戴東原の說も仁齋の說と同じく氣化とは矢張り原子の如きもので形質の吾人の目に見えざるものであらう。それが化合して一の形質を成せば天地の間に見ゆる品物となると見ることが出來る。而して此の氣が一陰一陽流行活動して已まないものであるから之を道と名づけたものである。既に流行活動して已まない以上は、それに一定不易の法則が存して居ることは勿論のことゝ見たのである。此く見るときは戴東原の說も仁齋と同じく宇宙活力論であるが、活力は氣の有する力に外ならない。而して氣は原子か電子の如きものとすれば遂に唯物論に歸せざるを得ないことゝなる。唯之を西洋の唯物論と比して如何なる差異が

あるかは今論ずる暇がない。但此に一つ見逃すことの出來ないのは、仁齋が天といふ宇宙の主宰なものを置き之を以て天道の天道たる所以のものを爲したことである。

る或曰。一陰一陽。往來不已之理。或可得而知焉。至於維天之命。於穆不已之理。則不可得而聞也。一天道而有此二端者何哉。曰非有二端。一陰一陽。往來不已者。以流行言。維天之命。於穆不已者。以主宰言。流行猶人之有動作威儀。主宰猶人之有心思智慮。其實一理也。然論天道之所以爲天道。則專以主宰而言。書經易象孔子所謂天道者是也。故中庸引維天之命之詩。而釋之曰。蓋曰天之所以爲天也　可見雖若有二端。然至論天道之所以爲天道。則專在於主宰也。（語孟字義卷上）

此の言以て仁齋が宇宙に精神的主宰の存在することを認めたことを證することが出來る。その他に天地之心といひ天心といつたことが少くない所より見れば宇宙に精神ありと見たことは疑ふべからざるものである。而して戴東原も亦宇宙の靈を以て主宰と認めたことに於ては仁齋と殆ど異なつて居ない。その言に、

氣之流行。既爲生氣。則生氣之靈。乃其主宰。如人之一身。心君乎耳目百體是也。豈待別求一物。爲陰陽五行之主宰樞紐。（緒言卷上）

といへるが是れである。此に據れば戴東原も仁齋も同じく唯物論者と認むることは出來ない。そ

は氣の活動には之を主宰する神靈の存在することを認めて居るからである。唯々その氣の主宰者なる神靈を以て氣以外に存するものとせずして氣の內に存するもの、卽ち內在的のものと認めたる點を注意せねばならない。然し宋儒の所謂所以然の理も陰陽の氣以外に存するものと見たものは、一人もなかつたといふことも知らなくてはならぬ。此に至りては仁齋戴東原の說は宋儒の說と幾何の相違が存するか。

宋儒は陰陽をして陰陽たらしめ天道をして天道たらしむる所以の根本原理を以て太極と爲し所以然の理となしたのである。然るに仁齋も天道の天道たる所以のものを以て主宰的天となし、東原も生氣の靈が天道流行活動の主宰となしたのは殆ど宋儒と相違する所はない。唯その相違する所は靈と云ひ天と云ふと所以然の理と云ふ所で、一は宇宙の實在を宗敎的に表象し、一は哲學的に表象したるに過ぎないのである。此の如く見來れば陽に宋儒を攻擊して陰にその思想を取入れて居るものと云ふのは決して誣言であるまい。況んや朱子の門人の陳北溪が左の如く述べて居る所と殆ど同一の說を爲して居るおや。

二氣流行萬古。生々不息。不成只是空氣。必有主宰之者。理是也。（性理字義）

天所以萬古常運。地所以萬古常存。人物所以萬古生々不息。不是各各自恁地。都是此理在中爲之主宰。便自然如此。（字義詳講卷下）

仁齋の說の如きは陳北溪の說そのまゝとも謂ふべきものである。余が此く云へば或は辯護して云ふであらう。宋儒は理を寂靜的に見て居るが、仁齋東原は主宰を活動的に見て居るから、その間に相違する所があると。此は宋儒の說を誤解して居るものゝ云ふ所で宋儒の眞意でない。宋儒は決して宇宙の實在を寂靜的に見て居るものでない。井上哲次郎氏の如きも宋儒の哲學を知らざる一人で、その著日本古學派哲學の中にも、

仁齋は宋儒の寂靜主義に反し活動主義を取り世界と人生とを併せて悉く活動的に考察せり。云々。

といつて居るが、人生の事は後に論ずるとして世界觀に就ていはんに、如何なる所が寂靜主義であるか。彼は仁齋の見たるが如く理の字を見て寂靜主義と認めたのであらうが、此は大なる誤りである。宋儒は氣には動靜ありと見て居るが、氣の根原たる所以然の理卽ち太極には動靜ありとは見て居らぬ。卽ち太極に動靜あるにあらず、動靜する所以のものが存すると見て居る。朱子及び讀書錄の言に、

太極理也。理如何動靜。有形則有動靜。太極無形。恐不可以動靜言。（文會筆錄卷十）

讀書錄云。朱子曰。太極本然之妙也。動靜所乘之機也。是則動靜雖屬陰陽。而所以能動靜者。實太極爲之也。（同上）

同上蓋し動靜は陰陽に屬すべきもので、現象界に於けることであるが、實在世界なる太極には動

靜すべき所以のものが存して居る。故にそれが發現して氣の動靜となるのである。然れば太極を以て直に活動とも寂靜とも稱することは出來ぬが、此の中に活動すべきもの寂靜すべきものは存して居るのであるから此を以て宋儒の世界觀は一概に寂靜主義とのみはいへぬのである。當今の學者は能くも古人の說を研究しないで早合點して古人の說を錯會するから困るのである。然し此の弊は古人にも有つて仁齋東原何れも宋儒の說の眞意を理解することが出來ないで、少しく理論が高尙に涉れば直に老莊の說なり佛敎の說なりとして之を排斥したのである。然しその實老莊の說も佛說も亦眞に理解することは出來なかつたのであらうと思ふ。

以上述べた所を概括すれば左の如くなる。

(一)伊藤仁齋も戴東原も同じく儒敎に於ける宇宙觀は宇宙の根原を一大元氣と見て居るものと解して唯氣論を取つたものである。而して所謂元氣は電子又は原子の如きもので活動力を有するものと認めた。此の說の根據は主として周易繫辭傳の易有二太極一。是生二兩儀一。兩儀生二四象一。四象生二八卦一に在る。

(二)此の宇宙に存する一大元氣は常に生々として活動して已まざる力を有するものと見て居る。此の點より云へば一箇の活動主義とも生々主義とも云ひ得る。更にいへば積極主義とも云ひ得るのである。此の根據は易の一陰一陽之謂レ道。及び天地大德曰レ生。又易の生々之謂レ易とある所に在る。

(三)此の一大元氣の活動には一定易ふべからざる條理法則が存在して居るもので活動と條理とは合一離るべからざるものと見て居つた。故に氣と活力と條理との關係を圖を以て示せば、

元氣（活力／條理）

の如くなつて畢竟元氣には力理の二作用を有することゝなる。此は易の一陰一陽之謂道。及び形而上者謂之道。形而下者謂之器等に本づいたものである。

(四)仁齋は元氣は空間的には生あり動ありて死なく靜なく時間的には始なく終りなきものと認めた。此は活動主義を取れる自然の結論である。

(五)仁齋も東原も同じく天道の天道たる所以は天なる宇宙の主宰に依るものとして氣の根原を以て精神的の天と爲した。此の點より云へば二家の說は唯氣論を脫して有神論とも見るべきものとなつて居る。此は孔子の天道詩の維天之命。於穆不已等の思想に本づいたものである。（未完）（大正一三、一一、一〇哲學會講演）

（戴東原伊藤仁齋の宇宙觀の批評及び人生觀は次號に於て述ぶべし。）